本号掲載の論文要旨

平中「ありはてぬ」詠受容に見る女人の生

玉田沙織

本稿では平中こと平貞文の『古今和歌集』所収歌に学んだ作品を取り上げ、女性の生き方をめぐる特徴的な受容を論じた。平中詠はその表現性から多くの共感を呼び、想像力を刺激したとおぼしい。平安時代の女性歌人の家集に取り込まれたほか、『大和物語』『風につれなき』『新蔵人』絵巻において、主人公たちが生き方を模索する中で引用されている。これらの受容は、制約の大きな性を生きる女性たちの関心の所在をうかがわせるものである。

禅寂作『月講式』について

―東から西へ往く本尊―

猪瀬千尋

『月講式』は禅寂作による、鴨長明仏事のための講会の式である。本論では、本尊を虚空の月とするこの『月講式』の分析を通して、その思想について考察する。

まず第一、二節で講式の構成と、本尊の記述の典拠を考察した上で、第三節では『月講式』が諸法実相論に基づき月への執を菩提へと導いている点を指摘する。そのための具体的な観想法を第四節で考察し、第五節でそうした構想が作者・禅寂の長明への配慮であった点を指摘する。

越境する『蛇にピアス』、ファルス不在の「快楽」

―日中作家作品比較を通して―

陳晨

『蛇にピアス』は作家金原ひとみのデビュー作であり、若者の刺激的な日常を先鋭的に描く作品として注目を浴びている。本稿では、本作が中国で「日本80後作家の作品」として受容された事情に注目し、その理由と意義を分析するにあたって、中国「80後作家」春樹の『北京ドール』との比較を行う。その目的は、作品が越境するたびに生じてしまう「ずれ」についての理解を深めることができないか、また、共に女性の語り手から異性愛をテーマにされた作品として、

二作に描かれる「セックス」に焦点を絞って、女性作家による身体的経験の語りがいかに変容したかについて、ジャンルや言語、国境を越境する視点から明らかにするということである。

1930年代後半における雑誌『モダン日本』の編集体制

―前線と銃後、植民地朝鮮をめぐって―

張　ユリ

雑誌『モダン日本』は「昭和モダニズム」を標榜する雑誌として出発したが、「支那事変」勃発直後から戦時下体制に入って1943年『新太陽』に改名するまでプロパガンダとしての役割を果たした。本稿では先行研究であまり注目されてこなかった『モダン日本』のプロパガンダ化に焦点を合わせ、他の雑誌と異なる『モダン日本』の戦時下における編集体制の特徴を明らかにした上で、編集長である朝鮮人の馬海松とプロパガンダ化の影響関係について考察を行った。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における〈記憶〉の発見

―〈街〉から〈世界の終り〉へ―

王　静

本稿は、村上春樹の「街と、その不確かな壁」と『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を比較した上で、後者の再評価を試みたものである。それによって影・心・記憶の新たな関係性が結末を逆転させることと、個人の再生をもたらす記憶の動的メカニズムとを解明した。その上で「街と、その不確かな壁」が、街のアンチユートピア性を露わにする物語であるのに対して、『世界の終り』は、アンチユートピアで生き延びる道を示す物語であると結論づけた。

感情動詞オソルのヲ／ニ格選択について

―中世和漢混交文を中心に―

松野　美海

本稿では感情動詞オソルについて中世和漢混交文の例を中心に取り上げ、感情の向かう先を表示するヲ／ニ格が確定性において対立することを示した。用例の考察から名詞が節をなす場合、ヲ格例では補文節で、未実現事態を表すこと、一方ニ格例は関係節で、モノ・ヒトを表すことが明らかになった。これは、ヲ格名詞は確定性が低く、ニ格名詞は確定性が高いことを示すと考える。節以外の場合も同様の傾向があった。さらに現代語までの様相を記述し、ヲ格例の割合が高くなったこと、確定性高の名詞もとるようになり、ヲ格例の幅が広くなったことを示した。